

元、備州岡島藩お台所役

浪人・郡山京之介

(一) 参勤交代

成平 一平太

鍬を振り下ろす郡山京之介の背中に真夏の太陽が容赦なく照りつける。つげ笠をかぶってはいても、したたる汗が音を立てながら掘り起こされた土の上に斑点模様を造っては瞬く間に消える。ひと畝耕すごとに屈み込んで、土の塊を手のひらでもみほぐしてゆく京之介の顔は泥でその人相さえも判別しにくい。

「郡山さま、そろそろお昼刻かな」

小田原宿で呉服を扱う大店の隠居、相模屋鴻右衛門が京之介に声をかけた。

「もう、そんな刻限に……」

京之介は首に巻いていた手ぬぐいで顔の汗を拭きながら背中を反らした。

宝暦十年八代將軍吉宗の孫、家治が十代將軍として

政を司る頃には、侍が鎧をまとり生死を賭けて戦ったなどということは伝聞でしかなくなっていた。それでも幕府は財政を豊かにせんと諸国に隠密を放ち改易に値する不始末を探っていた。

郡山京之介は、瀬戸内海に面した備州岡村藩四万五千石の台所役人だった。役目柄、料亭の板前と向こうを張れるほどの腕前を誇っていた。

「武士たる者、お役目第一ではあつてもいざというときのための剣術をおろそかにしてはならない」

今は亡き、父親の口癖だった。京之介は幼い頃から藩の道場に通ったこともあり、師範代に匹敵するほどの強者との評判を得ていた。

代々のお台所役で俸禄百石。三十一歳。妻とはわずかに二年の生活後、病氣にて死別。嫡子を授かることは無かった。以来、独り身を通していたが藩主が病に倒れると同時に跡目を巡って城代家老派と江戸家老派とのお家騒動が勃発。ほどなくして藩中に放たれていた隠密を回し、幕府中老の耳に入り改易となった。

「先のことさえ考えるのをやめれば気楽なものよ」

俸禄を失い諸国を流れ歩く浪人と化した京之介の口癖となった。

京之介は井戸で土に汚れた躰を洗うと台所へと向か

った。手に持った箸には、畑で採れた茄子と胡瓜が幾つか入っていた。

鴻右衛門の隠居所として建てられた「松風庵」は、小田原の宿場町から北へ一里ほどの山間の入り口に建てられていた。名前の通り裏山には赤松が群生し、秋には多くのきのこの恵みをもたらしていた。

「なにやらいい匂いがしますね」

畑仕事を終え、井戸で鉢を洗い終えた鴻右衛門が手ぬぐいで顔を拭きながら台所へと入ってきた。

「お疲れさまでした。もうすぐ飯も炊き上がりますから。まずはお茶で一息」

京之介は湯気の立つ湯飲みを上がり框に腰をおろし、腰を軽くたたきながら背を反らせる鴻右衛門の脇に差し出した。続けて箱膳を板間の上に置いた。

「今日の昼餉は、揚げ茄子と鮎の干物でございます」

「それは贅沢な」

愛用の大きな湯飲みを片手に鴻右衛門の顔には笑みが溢れている。湯飲みのお茶を半分ほど口にする。鴻右衛門はおもむろに立ち上がり板間のわら座布団に腰を降ろし、目の前の箱膳から放たれる匂いを味わうかのように軽く目を閉じ鼻に神経を集中させた。その仕草は幼子かと思えるほどに笑みを浮かべ顔を軽

く揺らした。

「しじみ汁でございます」

碗に注がれた汁が湯気をゆらしながら放つ。

「熱いものは熱いうちに口にするのが一番美味しくいただくこつです。それぞれの食材の命をいただくのです。ありがたみを持って出来る限り美味しい内に頂くのが食材への供養ではないかと……」

「まさに。郡山さまはお武家さむらいさまなのに料理の腕もさることながら僧侶のようでもある。その上、やつとうの腕前も……。本当に不思議なお方だ。さあさあ、一緒に」

京之介が松風庵に居着いて一ヶ月ほどになる。

隠居の鴻右衛門が、その身なりの良さから流れ者の浪人から肩が触れたとの因縁を付けられ、手に提げた巾着を奪われ掛けていた処を京之介が助けたことが縁での居候だった。相手の浪人が刀を抜いたものの京之介は刀を抜くこともなく、落ちていた棒きれを拾い、相手の肩間に打ち込んだ。浪人は太刀打つこともできず逃げ去るしかなかった。

「郡山さま、お腰の物をお捨てになることはできませんか？」

昼餉を終え、湯飲みを持つ京之介に隠居が問いかけ

た。その表情には商いを通じて人を見定める目を養ってきたという自信がさりげない視線に感じられた。

「刀をですか？」

京之介は、鴻右衛門の問いかけに戸惑いを見せた。確かに浪人の身となってから刀を抜いたことは一度も無い。だからといって日々の手入れを怠ったこともない。藩お抱えの剣道場の師範代に推挙されるほどに修行を重ねてきた刀への愛着は包丁への愛着に勝るとも劣らぬほどであった。

「郡山さま、気ままな旅もいいでしょう。しかし、年老いて死ぬ間際までともいかなでしょう。ここに落ち着いてみてはいかがですか？」

「ここに？」

「そうです。この松風庵にです。資金は私が用立てします。隣に小料理屋を建てて郡山さまが板場に。きつと繁盛しますよ」

「小料理屋？」

「そうです。郡山さまが小料理屋の主人に。なんなら女将さんもお世話しますよ。お子さまをおつくりになつてこの地に根をおろす。使用人もわたしが集めます」

京之介にとって身に余るほどの厚意ではあったが返事に困った。確かにいつまでも流れているわけには

いかない。だからといって独り身だからこそその気楽さ。しがらみのない今、京之介にとつてなんらの不自由もなく明日の不安もない。まれには遭遇する苦をも受け入れ、その苦を楽しむ。多少の不便やひもじさは許容するしかない。どうにもならない苦難が来ればそれはそれ。

「ごめんよ。こちらに郡山京之介さまがご厄介になっているつて聞いたのですがー」

京之介が返事をあぐねている間合いを助けるかのように玄関先から聞き覚えのある大声が板間に飛び込んできた。

「大きな声を張り上げおつて。知り合いが訪ねてきたようです。ちよつと失礼をいたします」

京之介は助かったとばかりに腰を上げた。もつともその顔は鴻右衛門を氣遣ことを忘れてはいない。苦虫を潰したかのように眉間にしわを寄せ面倒くさい奴だと言わんばかりに「やれやれ」と小さく呟きながら腰を上げた。

「善次郎、よくここに居るとわかったな」

京之介は玄関先に顔を出すなり善次郎に声を掛けた。その顔には身分の違いなどみじんも感じられない笑みがこぼれていた。

京之介と善次郎は流れ旅の仲間だった。

木綿の着物の裾が足に絡まないようにと背中の中の男帯に差し込み、拗ねを脚絆で巻き、腰には長脇差し一本。小さな行李を二つ、真田紐でつなぎ肩に掛け、手には三度笠の出で立ちの善次郎。貧乏な百姓を嫌つての流れ旅。器用な手先と口達者を活かし、どこの宿場でも「何でも屋の善次郎」として売り込みながら小銭を稼いでは路銀にしていた。少ない手間賃をもとに賭場に入りし、今日は運が付いて回つたと、親元に飛脚便での仕送りをするほどの孝行者でもあった。

「旦那、探しましたよ。てつきり小田原の宿場に居るものだと。宿という宿を……。まさか宿場外れの隠居家とは」

「そうか、それは悪かった。で、なに用だ？」

「なに用だつて、のんきな。路銀も尽きる頃だと思つていい稼ぎ口を見つけてきたんですよ」

「うまい話か？」

「それはもう。旦那にびつたりでいい稼ぎに。しかもおいらとおしず姐さんも一緒にきたもんだ」

「おしずさんも小田原宿に来てるのか？」

「来てるのかはないでしょ。旦那、言つたじゃないですか。二ヶ月後には小田原あたりでつて、閑宿を出る

ときに。おいらと、おしず姐さんは伊勢で一稼ぎ。旦那は東海道を上るつて。別れた時に」

「そうだったな。で、伊勢では稼げたのか？」

京之介は右手でサイコロ博打の壺を振る仕草をしながら善次郎に柔らかな視線を投げかけた。

「ええ、おかげさまで。稼ぎの中から二両ほど親に送ることができました」

「そうか。相変わらず親思いだな善次郎は」

おしずは米問屋の一人娘として大事に育てられたが十歳の時に母親が病気で他界すると直ぐに腹違いの妹が産まれ、何一つ不自由することなく後妻にかわいがられた。妹のおきよに跡をと氣遣つて二十三歳の時に店を飛び出した。七年前の春だった。習い事で覚えた小唄と三味線を飯の種として流れ歩くうちに覚えた壺振り。以来、「鳥追いのおしず姐さん」としての通り名。美形であったこともあり、通り名が街道を一人歩きするようになっていた。もつともその美形が難を呼び込むこともあった。

甲州街道の宿場町でのご開帳。おしずが壺を振つていたときに流れ者のやくざ三人が因縁を付けて賭場をひっくり返した。勸進元のやくざとの怒号の投げ合い。

雨戸を蹴り破つてのつばぜり合いが繰り広げられたが、流れ者の方のはるかに強い。戦闘意欲の衰えた地元のやくざとの間合いを計るかのようにおしずの手を強引に引つ張つてその場を去ろうとする流れ者。

「いいから来い。悪いようにはしないよ。おしず姐さん。おれん地の縄張りで壺を振つてくれりゃあいい。親分がめんどうを見てくださる」

「ふざけたことを言うんじゃないよ。拐かしかい」

おしずは切つた啖呵と同時に背中のお太鼓に隠し持つていた合口を抜き、やくざに向けた。

「気の強い姐さんだ。やめときな、三味線が弾けなくなるぜ」

「おしず姐さん加勢するぜ」

賭場の客として来ていた善次郎が見かねて長どすに手を置き腰に力を入れるかのように少し落とした。

「兄さん、かつこ付けてると取り返しをつかないことになるよ」

やくざ者の男たちは一端身を引いてかまえたものの善次郎の力量を見切つて余裕の啖呵を口にした。

「やかましい。上向き掛けた賭場を台無しにされてこつちは大損。腹の虫を押さえるのに調度いいつてもんだ」

よほど腹の虫が治まらなかつたのか、一か八かの啖呵を切る善次郎の顔が高揚している。

「よせよせ、おまえさんのかなう相手じゃないよ」

通りかかつた京之介が善次郎の肩を掴み後ろへと引き下げた。

「よけいなお世話だ。昼間つから無理を通そうとしているこいつら。目の前で姐さんに難儀がかかつている。見て見ぬふりなど俺にはできねえ」

流れ者のやくざ家業。いっどこで野垂れ死にしようが、喧嘩で切られて死のうがそんなことは気にしてもいない。どうせの人生、後ろ向きには生きたくない。はなつから年老いて死ぬことなど考えてもいない。男として死ぬるなら本望と、善次郎にとつて虚勢は生きてくうえで捨てることのできない誠の意味をなしていた。

「やめとけ」

京之介は、鞘から刀を半分抜きかけた善次郎の手首を強く押さえつけ、鋭い眼光を流れ者のやくざにぶつけた。手首を押さええられた善次郎は、その握力の強さと不動明王にも似た京之介の身構えにみじんも動く事ができなかつた。

「わたしの見た限りではおまえらに分はない。はなつ

から姐さん目当てに賭場を荒らしたな」

「やかましい」

一番大柄なやくざが刀を振り上げると同時に京之介に襲いかかった。地元のやくざをたたきのめすほどの強者ではあっても京之介の相手ではない。素早く身をかかわすのと同時に刀を取り上げ相手の肩に峰打ちを食らわした。その身のこなしを目の当たりにした流れ者のやくざは退散するしかない。

「旦那、強いねえ」

「本当に」

おしずは京之介の強さに関心しながら抜いた合口を背中のお太鼓の中へと納めた。

「どうです。助けていただいたお礼にちよつとそこで。」

お兄さんも一緒にいかがですか？」

そう言うとおしずは京之介の返事を待つことなく歩き出した。

「さあさあ、だんな。おしず姐さんがああ言ってるしやる。ごちになりましょうよ」

善次郎は小躍りするかのようにはしゃぐ心を隠すことなく満面の笑みを浮かべながら京之介の背中を押しした。先ほどの捨て鉢かのような啖呵を切ったことなどすっかりと姿を消していた。

「小料理屋なんて粹な処、おいらにはとんと縁が……」

「なんだ、若い。料理屋に入ったことがないのか？」

「自慢じゃないがこちとら貧乏慣れの旅からす。場末の居酒屋かそば屋がいいとこ。とても小料理屋なんて柄じゃ」

「そうか、じゃあこんどうまいものを作つて食わせてやろう」

背中で聞きとつた二人の会話におしずが振り向きながら口を開いた。

「作るつて？ お武家さんがかい？」

武士が刀では無く包丁を手に台所に立つて料理を作ることなどおしずには想像もできなかった。

「おお、こう見えても包丁はお手のものだ」

「へえ、刀も使えて、包丁も？」

善次郎は心の底から関心しながら京之介の懐の広さに愛着を感じ始めていた。

「まあ、そういうことだ」

「あつしの名前は善次郎、お武家さんは？」

「郡山京之介。元、さる藩の台所役。藩お取り潰しで今は気楽な浪人の身での流れ旅を楽しんでおる」

三步ほどおしずの後ろにつきながら歩く二人。会話を楽しむかのように時折笑い声を上げながら半里ほど

を歩き宿場街へと入った。

善次郎がおしずと言葉を交わしたのは今日が初めて。旅の途中に賭場にも顔を出していた善次郎にも「おしず姐さん」の噂は耳に入っていた。たまたま寄つた賭場に噂通りのおしずを目の前にし、はしゃぐ心をおさえながら札を張っていた善次郎。さいの目を読むかのような熱い視線を時折おしずの瞳にも投げながらの博打だった。

壺振りの役目としては賭場の客の状態に合わせ勸進元により多くの寺銭が入るようにさいの目をあやつることが求められる。全てがうまくいくわけでもないがおしずの腕前はどこの宿場でも勸進元に喜ばれ、相応の路銀を手にすることができた。

三人が初めて顔を合わせ、酒を酌み交わした席でそれぞれが流れ旅に至つた理由を誰からとはなく口にした。

「みように気が合うね。旅は道連れ。どうだいこの先は三人一緒に流れ旅つていふのは？」

よほど馬があつたのか、おしずがことの弾みで口にした。

「そいつはいいや。ねえ、京之介の旦那、いいでしょ」「ああ。しかし、いつも一緒にいふのも気疲れがす

る。流れる方向を定めては落ち合う宿場を決める。それまではそれぞれが勝手気ままな流れ旅」

「決まった。じゃあ次に会うのは二ヶ月先。伊勢参りをかねて関宿あたりでどうです」

善次郎はこれまでの人生に気の合う仲間の存在はなかった。貧しさを嫌つての流れ旅ではあつたが、歩く日々の中にはひもじさに涙することもある。

もつとも百姓暮らしの中にあつても一年中がひもじい思いをしながらの土いじりだった。米を作っているにもかかわらず茶碗に盛られた白い飯が自身の口に入ることはない。少しばかりの米に野菜くずのおかゆさへご馳走であつた。野山からの恵みこそが腹の足しといった生活に両親と兄弟を捨て独り村を出た。だからといって当てがあるでもなく地べたを這い、口に入る物は何でも食べた。人が嫌がる汚れ仕事で小銭を稼ぎそれを元手の賭け事も自然に覚えた。小銭にありつく仕事もなく、勝負を賭けた賭場に見放される時もある。助けてくれる仲間も居ない。そんな時には貧しかった時の知恵が飢えを癒やしてくれた。誰かのことを思いながら苦しさに耐える。けして甘えは許されない。しかし、今日を境に常に独りで戦うしかない日々から解放され、側には居なくても心強い絆で結ばれた仲間

ができた。どんな境遇に出会っても乗り切れる思いの善次郎だった。

「善次郎さんうれしそうだね」

おしずが、ほころんだ顔なのに涙目の善次郎に親しみを込めた。

「そりゃあ、こんなにうれしいことなんて。心を許せる仲間ができるなんて……、うれしくて」

「大げさだな、善次郎さんは。泣くほどのことでもないだろうに」

京之介の心の内にもこの二人への愛着が湧き始めていた。

「よしてくださいよさんだなんて。せっかく心の打ち解けた仲間になったのだから善次郎って呼び捨てにしてもらった方がおいらにはありがたい。京之介さまは京之介の旦那、おしずさんはおしず姐さん。これからはそう呼ばしてもらいます」

京之介は、善次郎と初めて会った時のことを想い出していた。

「で、善次郎。仕事とは？」

「へえ、山陰の津坂藩が参勤交代で江戸に向かつて大磯宿に本陣を張っているんですがね、お台所役が急な

病で代わりを探しているんで。どうです、旦那にうつてつけの仕事でしょ」

善次郎の顔は得意げだった。

「あつしが直接、道中奉行と掛け合って行列におしず姐さんとあつしも旦那の下働きってことで加わることに。三人分の手間賃をもらいながら江戸まで宿の心配も飯の心配もすることなく……」

「よしわかった。早々に大磯宿へ向こう」

京之介は鴻右衛門に事情を話し、夕餉の下ごしらえを済ますと松風庵を後にした。

「そうですか、仕方ありませんな。いつかまたこの松風庵にお寄りください。三年後でも五年後でも。この鴻右衛門が元気な内であればいつでもお訪ねください。その時にはきっと小料理屋を」

京之介は鴻右衛門が別際に口にした厚意を胸の内にしまい込み、大磯宿へと急いだ。

大磯宿は箱根の湯浴み客が江戸に、鎌倉八幡宮の参拝客が京に。それぞれ目的を果たした旅人が国元へと向かう中間点に位置しており、たいそうな賑わいを見せていた。

善次郎は早々に津坂藩本陣と大きな立て看板が立てられた光明寺の門前に着くと道中奉行への目通りを願

い出た。

「話は聞いておる。ついてまいれ」

案内されるままに三人は本堂の前に通されると片膝を石畳に付け頭を垂れたまま道中奉行が出てくるのを待った。

「待たせた。早々にご苦勞である。その方が郡山京之介か？」

「はっ。拙者、改易となった備州岡村藩台所役郡山京之介ともうします」

「では早々に台所に。なお、賄いについてはその方ら三人のみにて行うように」

京之介たちが台所に入ると上がり框に二人の侍が不審な行動をしまいかと見張り役として着座していた。

光明寺の修行僧が米を始めとした食材を台所へと運んできた。

「善次郎、米を直ぐに研いでくれ」
「へっ。で、どれくらい」

「その釜の大きさからして五升もあればいいだろう。水加減はおれがやるから、米をこぼさないようにな」

京之介は大きな瓶の蓋を開け米を研ぐように善次郎に早々に申しつけた。

「おしず姐さんはその野菜を洗ったら、漆器や膳を

洗い直してくれ」

「あいよ」

京之介は大きな鍋に湯を沸かし始めた。修行僧の話では、殿さまを始め家来衆は夕べから何も食していないらしい。それまでの台所役と賄い役は体調を崩し離れに伏せているとのことだった。しかも生死をさまよっているらしい。結果として参勤交代の道中にもかかわらず足止めをくついているとのことだった。

「ここの殿さまは誰かに狙われている。毒を盛られたに違いない」

声に出すこと無く呟く京之介。京之介は、瓶の水と米を見張り役に背を向けて舌の先で転がしてから善次郎とおしず指示をした。漆器類は今一度洗い直し熱湯を潜らせたさらしで拭き上げ念をおすこととした。

「郡山京之介とやら、事情を察したようじゃな」

京之介の仕草を見てとった見張り役の一人が口を開いた。

「お目付役殿、この食材の量からして三十人分ほどの用意かと思いますが、殿さまには何人前をご用意すれば」

京之介はあえて目付役人の問いを飲み込み、仕事に集中すべく指示を待った。

「お殿さまには三人分をご用意いただき、後は三十人分ほどを。そのほかに離れに伏せている五人の粥などを用意してくださいればそれでよい。献立については用意した食材で郡山殿にお任せいたします」

「承知いたしました。それと大変おくがましいことではございますが道中奉行さまに内々にてご相談があるのですが叶いますでしょうか？」

「あいわかった」

目付の一人が大声で裏手に控えている家臣を呼び、役目を交代して奥へと下がって行った。

「旦那、お武家さまの事情なんぞさっぱりですが、いくら夕べから何も食べていないとはいえ殿さまは三人前も召し上がるんですか？ それに参勤交代の行列のお供が三十人だなんて少なすぎやしませんか？」

「大名ともなれば色々有るのさ」

京之介は善次郎に何かを話すでもなく淡々と夕餉の支度を続けた。

「郡山京之介、道中奉行さまがお会いになるそうだ」

「恐縮でございます」

京之介は、簡単な下ごしらえをおしずと善次郎に指示し、「直ぐに戻るから」と言い残して目付役人の後に着いた。

善次郎は道中奉行との目通りが叶うと同時に畳に頭を付けるほどに腰を折ったまま間をおいた。その間を読み取った道中奉行は目付役を部屋の外に出した。障子の閉まる音を耳にすると同時に京之介が口を開いた。「夕餉の支度もありますので手短にお話し申し上げます」

京之介は、台所で感じたことをそのまま素直に口にした。理由については知る由もないものの殿さまに毒が盛られたこと。おそらくとりかぶとの根を粉末にした毒と思われること。下手人はご家来のどなたかであると思われること。これから作る料理は本来の膳ではなく箱膳に入れ蓋をすること。さらに長いこより四本で井形に封印すること。さらに結び目に墨で印しを付け毒を盛れないようにすること。毒味役が食したあと、殿さまの箱膳は道中奉行が直接封印を解いてから食すことを申し入れた。

「あいわかった。早速に紙に文字を記し何が書かれているのか判らぬようにこよりにし目付からそちに託すことにしよう」

「いえ、できましたなら直接こよりを受け取りたいのですが」

京之介は、毒を誰が盛ったのが判らない内は、誰

も信用しない方がとの思いだった。

「心配いたすな、おぬしをここに通した目付はわしのせがれの康一郎じゃ」

「そうですか、それは失礼なことを申し上げました」

京之介は、道中奉行との話が終わるとそそくさと台所へと戻り仕事にかかった。

目付役の手配で三つの箱膳が台所に持ち込まれ、おしずが熱湯で煮詰められたさらしを菜箸で取り上げ器用に絞り上げると箱膳を丁寧拭き上げた。

料理ができあがると京之介は箱膳の中に湯気の立つ青菜と麩を仕立てた醤油味のすまし汁を椀に。葛粉でとろみを付けた大根の煮付け、きんめ鯛の切り身の甘辛煮と梅干し二個をそれぞれ小鉢や皿に盛り納めた。

「郡山殿、道中奉行さまよりお預かりしたこよりがこれに」

目付役の康一郎が漆塗りの黒い盆にこより二十本ほどを乗せて京之介に差し出した。

京之介は、箱膳に料理を丁寧に入れ、最後に大きめの飯茶碗に炊きたての飯を前に、「空きっ腹により、少し柔らかめに炊いた」と目付に聞こえるように口にしながら飯を盛り蓋を閉めた。そうそうに箱膳の四隅に井桁状にこよりを掛けて堅く結び、結び目に筆で墨を

入れた。

「旦那、これは何のおまじないで？」

「こうして墨を入れて結んでおけば何者か結び直せば一目でわかる」

「なるほど、これじゃ毒の入れようがないってもんだ」

京之介は三つの箱膳全てに墨を入れると目付役に確認をさせて夕餉の用意とした。

墨を確認した目付役は腰元三人にそれぞれを持たせ、前後に付いて奥の間へと運んで行った。

「さあ、おしず姐さんに善次郎、これからが本番だ。急いで三十人分を作るぞ」

「あいよ。善次郎さんその椀を取っておくれ」

二人は忙しそうに多くの椀や皿を洗い、熱湯で煮詰めたさらしで拭いては積み上げていった。

「それにしてもおしず姐さん、ここの殿さまは命まで狙われるなんてやつかいですよ。それに大食いだ」

「何にも知らないんだね善次郎は。殿さまが口にするのはあの三つの内の一つだけ。殿さまが口にする前に二人のお毒味役が口にして何にも無ければ殿さまがそれを見て口にする」

「へえ、めんどくせえ。それにしても失礼じゃないですか。京之介の旦那が毒など入れる訳がないのに」

「おい、おまえら。口を動かしてないで手を動かさな
いか。その鯖の煮付けを皿に持って膳に並べる。次
は大根の煮付けだぞ」

せわしなく動く京之介が軽口をたたいている暇はな
いとばかりに二人を叱責した。

「殿様は斤目で御家来は鯖。差がつくねえ」

それでも善次郎の口が止まらない。

「当たり前だ。斤目なんてそんなに手に入るもんじゃ
ない。三十人が食するほどは獲れねえよ」

呆れたように京之介が応えた。

「それであつしらの分は？」

「心配するな、殿さま用に使った残りで作直すよ」

「こいつは贅沢な。ありがてえ」

三十人分の調理ができあがる頃、康一郎が台所へと
戻ってきた。

「郡山京之介、ご苦労であった。殿さまは大いに満足
をしておられた。ついでに次の宿場、川崎宿にての夕
餉の献立はそちに任せる故に、一足先に連れの者を買
い出しに向かわせるように」

「承知いたしました。明日の朝、早出とします」

「それと、明日の朝は六つ半には出立いたすゆえ、朝
餉は一善飯と汁物だけでよい」

「承知いたしました」
夕餉の後片付けが終わると三人は寝所へと引き上げ
た。

「善次郎、後で明日の夕餉に必要な食材を書き出すか
ら、明けの五つには出立してくれ」

「あいよ。それでおあしは？」

「心配するな、殿さまの御家来と一緒に行くはずだか
ら」

「えっ、あつし一人じゃないんで」

「当たり前だ、おまえの見張りをかねながら人集めだ。
江戸に入るのに大名行列が三十人ほどでは笑いものな
なる。だまって百人は雇い入れる必要がある」

「やっていることが俺にはわからねえ。なんでそんな
見栄をはるんで」

「見栄でやって居るわけではない。どこの藩も参勤交
代に掛かる賄い金を工面するのに苦労をしている。供
の人数を減らせばそれだけ賄い金を節約できるが、江
戸に入って行列の人数が少ないとそれはそれでお上か
らあらぬ疑いを掛けられる羽目なる。よって苦肉の策
が江戸に入る直前での人集めよ」

「ああ、大名家も苦労が多いね。その点、あつしらは
気楽なもんよ。せいぜい明日の飯の心配さえしてれば

いい」

「何いつてんのさ、お気楽なのは善次郎さんだけだよ」

おしずが間髪を入れずに笑いながら口にした。

「そんなあー。ところで旦那。殿さまは誰に何のために命を？…」

「さあな。先代の殿さまが亡くなって、跡目を嫡男の今の殿さまが跡を継いだのが気に入らない一派が居るってことだろうな」

「じゃあ、その一派をやっつければ良いだけじゃない」

「そう簡単にはいかないさ。確実な証拠もあるし、大事にもできない。幕府の耳にでも入れば藩は改易」

「さすが郡山殿、身にしみておられる様子」

「これはお康一郎さま。このような処に何用で？」

寺の隅にもうけられた納戸を枕屏風で部屋を仕切つての三人の今夜の寝所。台所仕事を終え、壁に背中を預けながらのたわいもない話を立ち聞きでもしていたかのような間合いで目付役の康一郎が障子を開けた。

「郡山殿、おくつろぎのところ申し訳ないが父上が折りいってご相談したいと申しておられるゆえ、ご一緒願えまいか」

「さて、道中奉行さまが拙者ごときに何を？」

京之介は不思議そうな顔立ちを隠すこともなく唇に

力を込めて真一文字にしながらも腰を上げた。

「お呼びだそうだからちよつと行つてくる。おまえ達は先に休んでいろ」

「あいよ」

善次郎があいの手を入れるかのように口にした。

「なんか、旦那。まんざらでもなさそうな…」

「そらそうよ。道中奉行さま、直々に相談したいって言われたのだから」

「父上、お連れいたしました」

「郡山殿。おくつろぎの処、恐縮でござる」

道中奉行は京之介を部屋の中へと招き入れた。康一郎もその後ろについて部屋の中へと入り、廊下の気配を伺いながら障子を閉めた。

「すでに何もかもお察しいただけていると思う」

「さて、何のことやら流れ者の私風情が…」

「ご謙遜めされるな」

道中奉行はそう口にする、殿の命がなぜ狙われて居るのか。下手人がこの参勤交代に帯同している者の中にいると思われること。残念ながらその特定も証拠もなく手を焼いていることなどを打ち明けた。

「いかがであろう、郡山殿の見立てなど聞かせてはもらえまいか？」

道中奉行は、一通りの話を終えると京之介が口を開くのを待った。

「拙者が仕えておりました藩も世継ぎ騒動が幕府の耳に入り改易となりました。貴藩におかれましても先代がお亡くなりになり御嫡男が跡目を継がれたことと思います。しかし、男子は御嫡男お一人ではなく、そこに騒動の原因ありやと推察いたしております」

京之介は一瞬の間をおき道中奉行の顔を見入ってからさらに話を続けた。

「相手方もできることなら殿さまお一人の命を取りたいと。それも密かに。公になって改易にでもなれば本末転倒。参勤交代の道中にて急の病にて。と、届けられるような筋書きにすることが狙い。従って、瓶の水や米ではなく殿さま用のお膳やお茶などに毒を仕込むことが肝要と思われませう。結果として殿さまに近いお就きの御家来か腰元なのではないかと」

「なるほど、それで？」

同席していた目付役の康一郎が口を入れた。

「康一郎、黙って郡山殿の話を最後まで聞け」

「これは失礼をいたしました」

康一郎はさも申しわけないとばかりに深々と頭を下げた。

「神奈川宿までの各宿場。休息時での殿さま用の飲み水は多くの家来衆の目がありますので相手方も簡単に手が出せません。戸塚宿での飯にも大勢さま分を炊くとのことで先ずは安心できるかと。明後日には江戸上屋敷への到着ともなれば相手方も刻がないとばかりに焦りを見せるでしょう」

「なるほど。そこにつけ込むのですね」

「康一郎、黙って聞けと申すのに」

乗り出すかのように京之介の話に聞入っていた康一郎が感心するかのように口にしたために同じように聞入っていた道中奉行が腰を折るなどばかりに小声ながらも声を荒げた。

「そこで、こちらから隙を作って相手をおびき出すのです」

「なるほど、してその策は？」

「父上、黙って郡山殿のお話を」

「あいや、すまん」

道中奉行が軽く頭を下げた。

「いえ、康一郎さま。念のために廊下などの様子をそれとなく」

康一郎は、軽くうなずき音静かに立ち上がり部屋の中から外の気配を探ってから障子を開け、月明かりだ

けの庭先へと視線を潜らせた。

「大丈夫のようですな」

道中奉行の勧めに、京之介が話を続けた。

「そこで、明日の出立時に同じ竹水筒をお殿さまを含め全ての御家来に拙者がお渡しします。暑い夏でもあり道中に必ず口にする事になる水。竹水筒の底に米粒ほどの印しを入れておきます。康一郎さまは竹水筒を受け取った御家来衆の順番を物影からそれとなく伺って書き留めてください。なお、お殿さまの竹水筒の栓にはあらかじめ印しをしておきますので誰かが栓を抜けば判るようにしておきます。毒を入れるには栓を抜くか竹水筒そのものをすり替えるしかありません」

ここまで話を進めると京之介は一息つくかの様に障子の向こうに視線を投げ、廊下の気配を探った。

光明寺の中庭は月に照らされてはいるとはいえ、物音一つするでもなく何ら生き物の気配が障子を通すこととはなかった。

「お殿さまが水を所望されたときのお役目は康一郎さまとしてください。そして時折、手の内を悟られないように隙を時々につけていた、だき相手を誘い出しますくれぐれもわざとらしくないように自然のなかでの隙です。そしてこれも、悟られないように栓の印しと竹

水筒の底の印しをお殿さまにお渡しする前にご確認ください」

「承知した」

康一郎は感心するかのようにならずいた。

「父上、下手人が判明した場合にはどのようにな？」

「その場で切り捨てたい処ではあるが、背後について聞いたださねばなるまい。仕置きはそのあとだな」

「道中奉行さま、聞いただしはせねばなりません、仕置きをしてもこの後、何度も繰り返しお命を狙われることになりませう。ここはお殿さまの懐を大きく見せることの方が得策かと思われませう」

「懐を大きくとな？」

「そうです。道中奉行さまにはすでに背後についてご承知のはず。お殿さまはまだお若く先代さまの跡目を継いだばかりでございます。御正室さまを迎えられ、御嫡男がめでたくお生まれになったとしても跡をお継ぎになるにはまだまだ年月が必要でございます。津坂藩を後生まで残すためには弟君に傷を付けてはおほつかなくなることさえ考えなくてはなりません。おそらく後ろ盾は江戸家老さま。江戸家老さまには隠居いただいて御嫡男に跡目を譲るよう諭されるのがよろしからうと」

「確かに。それにしても後ろ盾が江戸家老であるとのようにして？」

道中奉行は、京之介の眼力に恐れをなしたかのよう

に口にした。
「道中にてお殿さまが他界されれば直ぐに後継者をお届けしなくてはなりません。結果として参勤交代が不守備となりおとがめさえも覚悟することになります。独り身のお殿さまは御正室を人質として江戸に住まわすことが叶いません。代役として弟君となります。お跡目お届けの際にはそのままお目通りを願い出ればことをなすことができます」

「いやあ、郡山殿には関心いたす。まさにご推察の通りでございます」

「それほどのことはありません。大名家の抱える悩みを経験していれば誰にでも容易にわかることです」

翌朝、七つには三人が台所に立った。

「善次郎、夕餉の食材の書き付けを落とすなよ」

「心配するな、子供じゃないぜ。それよか、飯をこがすなよ」

かまどの火が燃え上がると善次郎は川崎宿へと目付役人とともに先を急いだ。

「善次郎殿、食材の書き付けをわしにも見せてもらえ

まいか？」

川崎宿まであと一刻、茶店で休憩を取った善次郎に目付役が親しげな笑みを浮かべながら口をひらいた。

「かまいませんよ」

「いや、なに。お足の心配もしなくてはならないので……」

善次郎が不審そうな顔をしたわけでもないのに目付役人は心の内をとりつくりうかのように愛想笑いをしながら書き付けを受け取った。

「特に殿さま用の食材が記していないが……」

京之介は買い求める食材にあらかじめ毒を仕込ませるわけにはいかない。殿さまが口にするであろうとながる特別な食材はあえて避けた書き付けだった。

「お目付役さま、川崎宿での人集めは大変なお役目なんでしょう？」

「いや、それほどでもない。中間と足軽を合わせて百人は必要ではあるが他の大名家との行列とかち合うことさえ無ければたやすい」

「そりゃあ博打だ。かち合わないよう祈るばかりだ」

「そこは問題ない。国元を出る際に道中たちよる各本陣へは前もって飛脚便で知らせてある。他国の動きがあれば知らせるようにと」

「なるほどねー」

「それよりか善次郎殿のほうが食材集めに苦勞するのではないのか？ 普通は朝の内の仕事であらうに。特に海老などと、海のものなど買い求めることができるのか？」

「へえ、まあそうなんですがね。そこがあつしの腕の見せ処。何でも屋の善次郎として糧をつないできたおかげで、どこに行つてどうすればいいかは察しがついているつてもんで」

「そいつは心丈夫な。郡山殿も良いお連れをお持ちだ。じゃあ、そろそろ発ちましょうか？」

「その前にあつしはちよつと用たしに」

善次郎はそそくさと人目に付かないように道ばたの木陰へと消えた。

川崎宿に入ると善次郎は早々に買い出しに走り回つた。食材を扱う問屋はどこも、すでに今日の商いは終わつたとばかりにのれんが降りている。

「善次郎殿、困りましたな」

「なあに、大丈夫でさあ。菜物はもう少しすれば百姓達が明日の商い分を持つてくるはず。店ではそれを商いがしやすいように洗つたり束ねたりして明日に備える。それを分けてもらうんですよ」

「なるほど。しかし、そんなに簡単に譲つてくれるものなのか？」

「そこが、何でも屋のあつしの腕のみせどころでさあ。それよりも難儀なのが海老を扱っているお店を探さなければ……」

江戸ならば大きな河岸もあり、鮮魚を扱う店は多いが川崎宿では小さな商いを営んでいる店ばかりである。ましてや海老は生きていなければならぬ。

「ごめんよ。こちらさんでは海老を扱っているかい」

「誰だいいおまえさん。今日の商いはもう終わつたよ。明日の朝早くなら有るかもしれない。出直しておいで。だいたい海老は活き物だよ。こんな時刻じゃ死んでるよ」

やつとの思いで見つけた鮮魚を扱う問屋だったが素つ気ない返事しか帰つてこなかった。

「善次郎殿、海老は無理であろう。鮮魚は朝の商いで昼までには口に入れる。酔なり塩をしたものでない限り夕餉の膳には無理がある。郡山殿が知らないはずもなからうに」

京之介が夕餉の膳のために何を作らんとしているのか目付役人には食材の書き付けを見ただけで想像できるほどの技量はなかった。鮮度の落ちた生の魚介類を

いかに調理しようとも懸念が残る。ましてやそのような料理を殿さまの膳に乗せることはできるはずもない。しょうがない。漁師をあたろう」

善次郎は早々に網元の家を探した。食材を集めることへの執着をにじませる善次郎に目付役人は付いて行くしかなかった。

「ごめんよ、網元さんはいるかい？」

何艘もの船と漁師を抱えているのだろう。大きな門構えの家の中から陽に焼けた大柄な男が出てきた。はだけかけた着物の裾を腰までまくり、きつく絞めた腰紐のような帯に挟み込んだ黒光りの男が出てきた。相撲取りかと思う歩き方は善次郎を威嚇しているかのようにも思える。

「お忙しいところ突然ではございますが網元さんで？」

どう見ても網元に見えるほどの風格を備えているとは思えない大柄の男。それでも善次郎はあえて網元と見間違えたと勘違いするかのような笑顔を振りまきながら相手が応える間を与えること無く口上を続けた。

「あつしは、善次郎ともうします。さる大藩の参勤交代が今宵の本陣を川崎宿に張ることになっております。そこで調理番を仰せつかっている台所役さまより食材の調達を仰せつかりました。新鮮な海老を五、六十尾

ほどと穴子や鱧、癖のない白身魚などが手にはいらな
いものかとまかり越しました」

「さてさて、おれは網元ではない。網元ではないがこの時刻に陸おかに上がった魚などない。無理だ」

「そうですか。てつきり網元さんかと……。なんとか網元さんにお取り次ぎ願えませんか？」

「それはいいが、あんたの願いは叶わんぞ」

大男は渋々ではあったが網元への取り次ぎを承諾し、奥へと戻って行った。

「善次郎殿。網元に会ってどうする？ この時刻に今の食材を買い求めるのだぞ」

今の漁師の話を理解できなかったのかとばかりに目付役人が訝った。

「大丈夫でさあ、あつしにまかしておくんなさい」

善次郎は、そんなことはみじんも意に介してはいないかのように網元が出てくるのを待った。

「話は聞いた。せつかくのお役目であっても叶えることは無理だ」

薄い灰色の麻の着物に桐の下駄。網元としての貫禄を漂わしている男が顔を出すのと同時にぶつきらぼうな物言いをした。

「これはこれは、網元さま。お忙しいところをお呼び

出しして申し訳ありません。あつしは善次郎ともうします。無理を承知でのお願いに上がりました」

善次郎はこれ以上ないというほどに腰を落としながら愛想を振りまいた。目付役人もそれにつられるかのように腰を折った。

「善次郎さんとやら、せっかくではあるが無理なものはどうにもならん。中に入ってもらってもいいがお譲りできる魚などない。塩漬けか干し物ならなんとかするが？」

「いえ、あつしが欲しいのは活きた魚で」

「だから：」

面倒くさい輩だとばかりに仁王立ちする網元。眉間のしわは善次郎を見下すかのようにも見える。

「網元さま、お手間を取らせることにはなりません、沖に停泊の船から下げているかごの中の物を譲っていただけないかと：。お屋敷の周りを拝見した限りではいけす籠も見当たらず、沖に停泊の船から吊り下げおられるごようす。きつとその中に手前どもが欲しい活魚も入っているのではと」

漁師は沖で獲れた魚の一部を長持ちよりも大きな竹籠の中に入れて船から吊り下げていることを善次郎は知っていた。そして時にはその竹籠の数は十にも二十

にもなることもある。朝早くから沖に出て漁師が網を引く。大漁の時もあるが不漁の時もある。獲れた魚の全てを問屋に流してしまえば相場の主導権は商人が握ることになる。問屋に売り渡す魚の量を調整することで漁師がその主導権をにぎることができぬ。

善次郎は網元の門を潜る前に一回りして空籠が干していないことを確認していた。

「善次郎さん。おまえさんなかなかのもんだね」

「それほどでも：。網元さんほどのお人なら先刻承知かとは思いますが、海老や蟹は少し湿り気のある靱殻を箱の中に詰めてその中に忍ばすように入れて陽のあたらないように気遣うことで活きたまま一日、冬なら二日は鮮度が保てます」

海老のあしは早い。浜に上げた時は生きていても客が手にする時にはすでに動かなくなっている。少しでも桶に海水を入れて泳がすこともできないではないが海水が温まれば同じ話であった。

「ほんとうかい？」

「是非、試してみておくんない」

「それは良いことを教えてもらった。善次郎さん、あと一刻ほどしたらもう一度きなせい。それまでには用意しておくよ」

「ありがとうございます。それではあつしは粃殻の調達をしてから出直してきます」

善次郎と目付役人は深々と頭を下げながら綱元の家を後にした。

「さあ、これで書き付けのめどが立った。お目付さまの方の人集めはよろしいんで？」

「拙者のほうは善次郎殿が宿場で色々聞き回っている間に口入れ屋に顔を出して頼んである。も一度、あとで顔を出すのが問題はなかるう」

「そうですね。じゃあ、ご足労ですがもう一度、青菜や根菜を集めに問屋回りにお付き合いを」

善次郎が京之介の書き付けの食材を揃え川崎宿の本陣、正源寺に持ち込むのとほぼ同時に行列が大手門を潜って石畳に黒に金を施した漆塗りの籠を降ろした。

「どうだった善次郎」

「へえ、旦那の書き付けの食材は一通り」

「さすが善次郎さん。たのもしいな」

おしずが心底感心したかのように善次郎の労を称えた。

「よしてくださいよ、おしず姐さん」

善次郎が照れた。

「それよりか旦那」

善次郎は神奈川宿本陣を早立ちするさいに台所の隅で京之介から耳打ちされたことを報告した。

「旦那の睨んだ通りでさあ。あの目付役人、宿場に入る前の茶店であつしが用足しに行っている間にどこの侍となにやらひそひそと」

「そうか、やはりな」

「旦那の竹水筒の方の守備は？」

「いや、今日は特に何事も無かった」

「そうですね。明日が正念場ですね」

「なにも起こらなければそれはそれでいいのだが……」

「いや、絶対になにか仕掛けてきますよ。このまま引き下がるなんてことは……」

「ねえ、何をひそひそと。昨日からおかしいわよ。引き下がるって何をよ？」

おしずが京之介と善次郎が何か隠し事をしていると訝った。もつともその顔つきから仲間外れにされているといった疎外感はみられない。

「郡山殿、夕餉の食材は揃ったのかな」

「これは康一郎さま。殿さまにはお着替えなど道中の汚れを落として頂いている間に用意が整うかと」

「それは上々。して夕餉の献立は？」

「参勤交代での最後の夕餉。道中のお疲れを癒やして

もらうために活きのよい海老や穴子に夏野菜の天ぷらなど召し上がっていただきたいと」

「天ぷら？ 天ぷらとは？ どのような料理かな？」

耳慣れない献立に興味を示した康一郎が問い直した。「小麦の粉を卵と水で溶き、その中に食材を潜らせて油で揚げたものでございます。それを出汁の利いたつゆを付けて召し上がっていただきます」

「それはおもしろい趣向だが……」

「つきましては熱い料理は熱い内にお召し上がりいただくのが一番。お庭先などお借りして目の前での調理とさせて頂きたい……。よからぬことを企てる輩に隙を与えずかつ、おいしくお召し上がり頂くにはこれが一番かと」

「あいわかった。父上に進言し、殿さまのご意向もあらうからしばし待つて頂きたい。なあと、郡山殿の申されることゆえ何ら問題もなからうて」

康一郎が、奥へと姿の消えるのを待つかのように目付役人が土間へと降りてきた。

「買付けた食材の下ごしらえは全てここで行うのか？ 庭先にては油に潜らせるだけなのか？」

「さようでございます。ここで下ごしらえをして全てを庭先に運びます。なにかもを庭先にて器に盛り、

お殿さまの膳にお届けと……。お毒味役さまにはお殿さまと同じ物を直前にお出しさせていただく所存でございます」

「あいわかった。よろしくお頼み申す」

目付役人は上がり框に戻り、京之介らの仕事を監視するかのように入つた。

京之介は目付役人の所作を気にすることなく調理に掛かった。

「半刻ほどで全てを終えるぞ。おしず姐さんはそのゴボウを小指ほどの長さの細切りにして水にさらしてくれ」

「あいよ」

小気味よいほど明るく微笑みを返すおしずの声ははずんでいる。この参勤交代の道中に何かが起ころうとしていることは察しがついていたがその何かがわからなかった。それを善次郎が教えてくれた。京之介と康一郎がやりとりをしている間に、おしずが釜戸の前にしゃがみ込んで子細を耳打ちしたのだった。

「ありがとうよ、善次郎さん。これで胸のつかえが取れたよ。私もそれとなく目配りするよ」

おしずは小声で善次郎に礼をのべながら柔らかな視線に笑みを乗せて胸の内を伝えていた。

「善次郎は飯を炊いてくれ」
京之介の指示が台所に響いた。

「もう始めているよ」

三人はせわしなく動き回った。それを目付役人がじつと見入る。活気づく三人の動きが発する熱気は剣先のような目付役人の視線をも引き連れて湯気となって立ち上がった。

「郡山殿、殿のお許しが出た。殿も天ぷらとかに興味を持たれたとのこと。中庭に準備してもらいたい手を貸そうか？」

「そうですか、それは良かった」

京之介は、康一郎からの許しが出るやいなや善次郎に空の酒樽を四つ運ぶように指示を出した。

康一郎はすぐさま奥に向かって大声を發し、奥に控えていた家来たちを台所へと呼び寄せた。

「拙者たちもお手伝いいたそう」

康一郎が声を掛けると京之介の指示で次々と中庭へと物が運ばれた。

「食材って、これを全部ですか？」

「そうだ、全部だ」

「だってこれは御家来衆の分も……三十人分は……」

善次郎は手伝うのが嫌で言っているのではないと目

で京之介に問いかけ、大きな箆に入った食材を幾つも運んだ。

「善次郎殿、殿さまの分だけだと毒が盛られやすくなる。郡山殿は、調理を見せながら食してもらうことであれもの目が集まると凶っておられる」

「なるほど。さすがは旦那、見直したぜ」

康一郎の耳打ちに善次郎は納得したのか手際よさが一段と増した。

大勢の手助けもあつて、それほどの刻を要することなく用意がととのつた。

居間の障子が閉められた中庭には調理台としての戸板が用意され、その上に火鉢が二つ置かれた。紫の炎が夏の夕暮れ時の庭先にパチツツと音を放つと、合図を待っていたかのように居間の障子が大きく開けられた。床の間を背に殿さまが座り、庭先に向かって三人の家来が正座をしている。

上座から道中奉行の大山元之進と毒味役が二人。同じように庭先に向かって腰元が、開け放たれた部屋の廊下に四人。左右に分かれて正座した。

京之介、おしず、善次郎の三人は片膝を庭に付けて深々と頭を下げた。

「郡山殿、天ぷらとやら殿も楽しみにしておられる。

早々に支度を」

「はっ」

京之介は返事をすると同時に、おしずは膳を運ぶように指示をした。

空の膳には、箸とおろし大根が入った小鉢、八寸ほどの笹に和紙を置いて廊下の腰元へとおしずから渡された。つづいて、火鉢に掛けられた鍋を戸板の上にするし、盆の上に置かれた四つの小鉢に出汁のきいた天つゆを京之介が直接しゃもじで注ぎ入れ、おしずに渡した。おしずは同じように廊下の腰元へとそれを手渡した。

「これは、天つゆでございます。お膳の大根おろしをこのつゆの中にお好みの量だけ溶き入れて、揚がりました天ぷらをこのつゆの中へと潜らせ、熱いうちにお召し上がりいただきとうございます」

小皿の大根おろしも天つゆも三十人分はあろうかと思われる量の中から京之介が殿様を始め目付役人、腰元、毒味役、道中奉行の視線が注ぐ中で小分けしながら用意したものであり、方が一にでも毒が仕込まれていよう物ならば参勤交代に帯回している誰しもが毒の餌食となる。大惨事ともなれば藩の改易を免れることは必定であり、殿様の暗殺を画策している一味にとつ

ても得策とはいえず最も安全な夕餉のひとつとなることを京之介は確信できた。有るとすれば腰元が廊下から居間の中へと運ぶ間でしかないが、これも多くの視線の中での仕草となりできるはずもない。

火鉢に掛けられた油の入った鉄鍋が「いつでもいいよ」と、誘うかのように熱気を放つ。京之介が菜箸から落とした衣に小さな泡が絡み小気味よい音を引き連れて上に浮いた。

「それでは先ず、海老から食していただきます」

「海老だと、こんな時刻に海老など食してもあたることはないのか？」

道中奉行が殿さまの面前でもあるにかかわらず訝つた。

「ご心配はいりません。海老はこのように今の今まで活きて降りましたものを食していただきます」

京之介の脇には靱殻が詰められた桶が置かれていた。その中に潜らせた海老を京之介が取り出すと手の中で窮屈そうに動いた。

「おお、生きておる」

殿さまが驚きを隠すこと無く始めて言葉を発した。

京之介は、素早く十匹の海老の殻を外し熱で海老が曲がらないようにと包丁を入れて腰を折った。続けて

揚げたときに見栄えの良いように海老の尾先を切りそろえ小麦粉をまぶしては皿の上に並べた。

「それでは今から油の鍋の中へと海老を入れます」

京之介は素早く小麦粉に卵と水を入れて溶いた鉢の中に海老を潜らせて油の中へと入れた。と、同時に鍋の中が騒がしくなる。本来ならば天ぷらはこの鍋の中の音をも食材とすることで一層美味く食すことができるのだが、相手が殿さまではそれは叶うことでは無い。鍋の中から取り上げた時に放たれる匂いもこの間合いでは殿さまには届かない。それでも京之介は食材の持つ風味を損なうことのない絶妙な泡立ちと音を聞き分けて鍋から海老を取り上げた。

「どうぞ熱いうちにお召し上がりください」

膳の上に置かれた笹の和紙に海老が一尾つつ乗せられると毒味役の二人が口にした。

「これは美味」

二人の毒味役が口を揃えるかのように感嘆の声を発した。

本来の毒味役としての役目は、殿さまの口に入る物と同じものを言葉が発すること無く静かに探るかのように口の中を転すことである。そして自身の舐の喉を通すことを持つて殿さまへの方が一を事前に察するこ

とであった。

「これは恥ずべき失態。平にお許しを」

つい、声を発してしまった毒味役が平謝りで額を畳に付けた。

「殿、どうぞお召し上がりを」

道中奉行が口にするよりも早く殿様の箸が動いた。

「これは美味。元之進、其方も早く食してみろ」

「それでは手前も……」

道中奉行ははやる気持ちを隠し、落ち着き払って始めて口にする揚げたての海老を口に運んだ。

「なるほどこれは美味」

揚げたての海老も四人目とあつてはさすがにほんのりとした温かみを残すだけとなる。それでも京之介の揚げた海老の味が落ちるわけでは無い。できることならば熱い内に天ぷらを食して欲しいと思うのが調理人としての心情だった。

「どうです。これだけの目の中、毒など入れようがありません。天ぷらは熱々のうちにお召し上がりになるのが一番。一番美味しいところをお毒味役さまが口にしてみてください……」

「無礼者、殿の御前であるぞ」

京之介の思いを察したおしずが口にするのと同時に

目付役人から叱責が飛んだ。

「よいよい。たしかに其の方が申すとおり。わしも天ぶらとやらの熱々を食して見たい」

殿さまのお許しが出たとばかりに京之介が、茄子、穴子、南瓜、牛蒡のかき揚げ、そして最後に茗荷みょうがの順に揚げては殿さまの膳へと運んだ。もう一方の火鉢に掛けられた鍋の中も程よい頃合いで出汁が沸いていた。「次に食していただきますのはふわふわ卵でございます」

京之介は沸き立つことなく湯気を立てるだし汁の中に溶き卵を小さく静かに回し入れ、かたまりかけたところをしゃもじですくい上げ椀の中に移し入れた。椀の中で卵が色よく盛り上がりを見せている。立て続けに京之介はおひつに入れられ、湯気のたつ飯を碗に盛り、豆腐とわかめの入ったすまし汁。さらに、小皿に胡瓜のぬか漬けをほどよく並べ、おしずりに渡した。

「郡山京之介とやら、どれも美味しく頂いた。できることなら江戸勤めの弟と江戸家老にも酒を酌み交わしながらこの天ぶらを食させてやりたい。どうだ、その二人とともに仕官する気はないか？」

「ありがたきお言葉なれど、今のところは諸国を流れ歩きながら土地、土地の美味しいものを食したく思つて

おります」

「そうか、それは残念な」

「申し訳もございませぬ」

「しかし、上屋敷にしばらく逗留するくらいはかまわぬであろう。今少しおぬしの作ったものを食してみた」

「いかがかな郡山殿、殿もおぬしの調理をいたくお気に入りのようにや。拙者からもお願い申す。今しばらくお付き合い頂けまいか？」

「承知いたしました。急ぐ旅でもなく夏が終わり、虫の声が耳に届く頃合いまでの間、江戸上屋敷にて逗留させて頂くことに」

「それはありがたい。ところで郡山京之介、香の物と熱いお茶を所望したい。茶漬けでもう一杯飯を食いたいのじゃが……」

「わかりました。早速に」

よほど今宵の夕餉が気に入ったのか気を許した数人の家来にししか見せたことのない笑顔。いつもかしこまっている殿さまの顔が緩み、上機嫌であることはこの場にいる誰にも伝わっていた。

殿さまの夕餉が終わると戸板は移動され家来衆がくつろぐ居間の前へと据え置かれた。

京之介は、先ほどと同じ順番にて調理を始めた。広間には十名を越える家来衆と四人の腰元が天ぷらを待っている。ここでも目付役の二人は役目として食にありつくことはできない。役目とはいえ、いつも最後に冷めた夕餉を台所の板間で食すことになる。もつとも五人の足軽たちはその後になる。

京之介は、家来衆の夕餉が終わると板間の目付役にも揚げたての天ぷらを用意した。

「いやあ、久しぶりに温かい夕餉を食することができました。それにしても天ぷらとやはらは美味。生涯忘れることはない」

康一郎が感謝の意を口にして奥の間へと入った。それを見計らって足軽たちが台所へと入ってきた。

「やつと俺たちの番だ。俺たちにも御家来衆と同じ天ぷらとやらを食わせてもらえるのかな」

いつもは握り飯と粗末な汁に香の物。南瓜の煮付けか鯛の焼き物が出ればご馳走の部類。そまつな物しか与えられない足軽たちが空かした腹をさすりながら口にした。

「今日の夕餉は、殿様も家来衆もおぬしらも同じ物を食してもらおう。おしず姐さんも善次郎もそこに座れ」

「えっ、いいんですか？ 旦那は？」

「心配するな、わしも一緒にいただく」
「そいつはいいや。これで一杯飲めればなおいいんだが」

足軽の一人が軽口を滑らす。

「そいつは無理だな。江戸に着いたらたらふく飲ましてもらえるさ。道中での粗相はどんなお咎めに繋がることも限らない。今夜が最後の我慢のしどころだな」

足軽たちにとってこの参勤交代での道中でもつとも贅沢な、かつ楽しい夕餉の刻となった。

翌朝、七つには昨日と同じように三人が台所に立った。夕餉とは違い朝餉の下ごしらえは一汁一菜と多くはないが今朝の出立に伴うお供の数が百人は増える。

総勢において百三十人分ほどの握り飯を作らねばならない。

「善次郎、飯を炊いたら全てを桶に移してもう一度炊け。ぐずぐずしている暇はないぞ」

「わかってるよ。任しておけ」

善次郎の威勢がいい。台所仕事を楽しんでいるのかのようにはしゃいでいる。

「おしず姐さん、香の物は殿さまと御家来衆の分だけでいいからな。道中の握り飯は塩だけでいい。梅干しは二個つつ添えて竹皮に包んでとりあえず百三十人分

作ってくれ」

「あいよ」

おしずも笑顔一杯の返事を返す。

この三人はよほど気が合うのかもしれない。いつも四六時中一緒に旅をしているわけではない。時折どこかの宿場で落ち合い、お互いの無事を確認するかのようになりに宿を供にする。食を取り、酒をくみかわしながら近況を語り、ときには大声をあげてだれ気兼ねすること無く笑う。風に流されながらの旅にはつらいことも多いのである。そうしたつらさが笑いに変わる瞬間がこの三人にとってつながり深くかけがえない束の間なのかもしれない。

「郡山殿、おはようございます」

「これは康一郎さま。おはようございます」

三人が台所に立ち、善次郎がかまどに火を熾すと同時に二人の目付役人が台所の板間に陣取った。

「お目付役さま、竹水筒の用意は昨日と同じ段取りとさせて頂きますがそれでよろしいでしょうか？」

「そのようにお願ひいたす」

京之介は康一郎の方を見ながら昨日同じように竹水筒に印しを入れるので物陰から家来衆が手にした順番を記して欲しいと目で合図を送った。

「旦那、今朝集まった連中の竹水筒はどうします？」

竹水筒の数は三十ほどしか用意がない。善次郎が心配して京之介に耳打ちした。

「それは心配ない。この宿場で雇い入れた者達は自分で道中の水ぐらいは用意してくる。そういうもんだ」

あえて、目付役人の耳に届くような声で京之介が問いに応えた。

朝の五つ半には正源寺の境内に人が集まりだした。四十人を越える男は皆、さる藩の中間とばかりに同じ袴纏を身にまとっている。さらに足軽の格好をしたものが五十人。口入れ屋も承知したもので集めた町人に羽織や袴纏を渡しながら道中で心得を指南し、送り出しているのだった。男の他にこれもお揃いの着物と帯を絞めたお女中といった装いの女が十人ほど境内に揃った。

「皆の者、朝早くからご苦勞である。それぞれの持ち場と手にする者を指図するゆえ、こちらに集まってくれ」

境内には集められた町人達がそれぞれ手にする道具が広げられている。昨夜の内に道具屋から運び込まれた物だった。

「へえ、何もかもこの宿で揃えられるんだ。見栄をは

るのも大変だねー」

境内に竹皮に包まれた握り飯を運んできた善次郎が、感心しているのか揶揄しているのかどちらともとれない驚きを口にした。

「出立あーつ」

馬上から道中奉行が大きな声で合図を送ると、殿さまの乗った箆を四人の足軽が担ぎ上げ足を踏み出した。

津坂藩上屋敷までは五里にも満たない。普通の旅人ならば四ツの刻に出立すれば八ツには着く道のりではあっても品川宿を出れば足運びが極端に遅くなる。いかに大人数の行列とはいえこれまでは江戸を目指してひたすら歩けばよかったがそうは行かなくなる。津坂藩の威厳を見せつけながら行列を進めなければならぬ。七ツか七ツ半が良いところであろう。その間、殿さまを乗せた箆に何がおきるやとも限らない。京之介と善次郎は中間の装いで箆を担ぐ足軽の直ぐ後ろを左右に分かれて付いた。おしずは、腰元たちの動きを見張るかのようにその中に入った。

異変は行列が出立してほどなくして起きた。

「康一郎、喉が渴いた」

箆に寄り添うように歩く康一郎に殿さまから声が掛かった。行列の足を止めることなく康一郎が箆を開け、

腰に下げていた竹水筒の栓を抜こうとしたときに印の無いことに気づいた。竹水筒の底には康一郎が最初に持ったときとは違う印しが付いている。こんなときのために康一郎は懐にも竹水筒を持っていた。康一郎が殿さまから竹水筒を受け取り箆の扉を閉めると同時に馬上の道中奉行に駆け寄り事が起きたと合図を送った。そして、京之介にもその旨を知らせた。竹水筒の底の印しを見れば誰が手にしていた物かは直ぐにわかる。京之介は善次郎に耳打ちした。おしずはそれとなく見張り、逃亡させることのないように注意しろと伝えさせた。

品川宿を過ぎ、いよいよ江戸に入るという手前で昼の休息のために行列を停めた。殿さまの箆は道の端に置かれ扉が開けられる。殿さまが箆の前に置かれた草履に足を入れ大きく背伸びをする。家来衆はその周りに集まり警護にあたる。川崎宿で集められた中間役や足軽たちはそれぞれ道端に腰を降ろししばしの憩いと共に握り飯をほおばりはじめた。

康一郎は毒入りの竹水筒の持ち主であった腰元に近づき京之介とともに草陰へと連れ出した。

「なぜここに連れ出されたかはわかっておろうな」

康一郎が念を納めさせるかのように静かな口調では

あつたが槍のような厳しい視線を投げた。と、同時に腰元は身を交わすように康一郎の前をすり抜け、五歩ほど駆けると腰に差していた懐剣を抜き、剣先を胸に当てた。

「やめなさい。命を無駄にするでない」

京之介がとつさに落ちていた小枝を腰元の懐剣を持つ手を目掛けて投げつけた。自刃し損なつた腰元はその場に泣き崩れた。

「さあ、立ちなさい」

康一郎がしやがみ込み腰元の肩に手を置き、腕を優しく引き上げた。

「その方独りの企てではあるまい。引くに引かれぬ事情を抱えての所業であろう。江戸上屋敷にて詮議はせねばならぬが命を取ることはない。そのような事は殿も望んではいない」

康一郎の諭す言葉も多くは耳に入らないとばかりに放心した腰元の手おしずが優しく引きながら行列へと戻る一步を踏み出した。

「こやつが殿のお命を。成敗してくれるわ」

いきなり目付役人の一人が腰元に切り掛かった。

「無駄なことはやめろ」

京之介が腰の刀を素早く抜き、目付役人の刃を振り

払い剣先を喉元に向けた。

「何をいたす。邪魔をするな。こやつは不埒者なるぞ」
目付役人がいきり立った。

「よせ、おぬしがこの腰元と同じ穴の貉であることは先刻より承知しておる。企てしくじり際には腰元を切るように命ぜられておるのである」

「何をおおせられる。拙者はなにも……」

京之介の問い詰めに目付役人は視線を泳がせながらも白を切るしか無かつた。

「川崎宿に入ろうというときの茶屋で、お主がどこぞかの藩士と思われる侍とひそひそと話し込んでいるのを善次郎が見届けているわ。おそらくは江戸上屋敷の侍であろう」

京之介は川崎宿に善次郎を向かわせる際にそれとなく目付役人の動向を探るように耳打ちをしておいたのだつた。善次郎は用足しをする振りをしながら時折木陰から目付役人にだれぞかが近寄ってはこないかと伺いながらの道中であり、その時の様子はすでに京之介の耳に届けていた。

「お主の腰の物は預かる。おとなしく江戸上屋敷まで帯同せい」

康一郎がこれ以上はないというほどの激しい怒りに

も似た視線を目付役に投げ、背中を押すように行列へと戻した。

七ツ半になってようやく行列は津坂藩江戸上屋敷の大門を潜った。黒塗りの籠が正面玄関前に降ろされ扉が開けられるとげ同時に迎えた弟の富司信と江戸家老の岩波弦史郎を始め、江戸詰めの家来たちが一斉に頭を垂れた。

「兄上には長旅のなか、無事にご到着あそばされ祝着に存じます」

「そちも元氣そうでなりより。何かと積もる話もある。弦史郎とともに早々にわしの部屋にまいれ」

殿さまが屋敷の奥へと姿を消すと同時に、川崎宿で雇われた町人達は庭先へと集められ手間賃が支払われた。

幸いなことに天気もよく月夜となる。町人たちは今から急いで帰れば、暮れの五ツまでには帰る事ができる。だれもが足早に川崎宿へと向かった。

道中で取り押さえられた腰元と目付役人はそれぞれが小さな部屋に幽閉され見張りが付けられた。

「郡山殿、道中おつかれさまでございました。先ずはお部屋にてご寛ぎください。夕餉のしたくは上屋敷の賄い役がいたしますのでお氣遣いめさることのなきよ

う」

京之介ら三人は今宵の寝所として屏風で仕切られた部屋が用意された。

「だんな、あの二人はどうなるんでしょうね？」

「きついおしおきはまぬがれないわね」

「きついってこれ？」

善次郎が二人を氣遣うとおしすが嘆くように口にし、それに反応するかのように善次郎が切腹の仕草をしながら氣の毒にとばかりにため息をもらした。

「さあ、どうかな」

京之介も二人のことを案じた。

「あの人たちは上から言われてそれに従っただけだろうにね。しがらみの中に生きるお武家の辛いところね」

おしすが口にした通り、上役から命じられればそれに従うしかない。ましてや藩の行く末のためと言われれば返す言葉は無い。しかし家臣とはいえ、親も家族兄弟もいる。妻や子もいる。残された者が主君への恨みを抱くことだってあるやもしれない。権力争いとはあらゆるつてを使い、利用できるものは容赦なく利用するものである。何かしらのしがらみによって利用されたに違いないあの二人。ことが不首尾ともなれば命が絶たれる事ぐらいはとうに覺悟をしているに違いな

い。それが武家に産まれたものの宿命なのだ。

藩のためなどではない。己の権力をより高めようとする自己欲。都合良く並べた理屈と、祭り上げようとする新たな君主。全ての首謀者が江戸家老であることはなにも事情を知らない京之介ではあっても容易に想像できた。どこの藩であろうとお家騒動とは二つの権力がぶつかり合い、神輿の上に乗っている者こそが君主にふさわしいとあおり立てる。重い神輿を肩に奮闘するのは何ら利益をこうむることのない家臣であり、大きな団扇を持ち煽りたてるのが首謀者と相場は決まっている。

「富司信。この一年、よう江戸上屋敷を守ってくれた。これからも力を貸してくれ」

君主、信智は道中での出来事を顔に出すこと無く穏やかな口調で富司信に語りかけた。

「はっ。兄上が何事も無く明日の登城を迎えられますこと祝至極。わが津坂藩にとりましてこの上ない喜びであります」

今回の企てを知らぬはずのない富司信。何事もなくこの江戸上屋敷の大門を潜ったということは事がなし得なかったというに他ならない。どこかに安堵の笑みを浮かべて傳く富司信のようすに道中奉行の大場元之

進が小さくうなずいた。

「ところで、弦史郎。そちも富司信をよ用に助けてくれた。難儀なことばかりで日々疲れるであろう。津坂に帰って隠居し、嫡男功一郎に家督を譲ってはどうか」
日頃の労に対する思いやりともとれる隠居の勧めではあったが弦史郎には針の筵の面持ちであるにちがいない。本来ならば切腹。家名断絶であっても何ら不思議はない。なにゆえの温情なのか弦史郎には推し量ることができなかつた。

「あとの者達の今後の計らいについては元之進に任す」
「承知つかまつりました」

元之進が量に額を着けんばかりに腰を折ると富司信と弦史郎もそれに習った。

「ところで元之進。台所役を務めてくれた郡山京之介とやらに今一度、仕官せぬかと説得をしてみてくださいか」

「兄上、郡山京之介とは？」

「参勤交代の道中にて巡り会った。改易となった他藩の台所役だったそう。昨日の夕餉の天ぷらとやらがすっかり気に入った。そなた達にも明日にでも食させてやりたい」

「そうですか、それは楽しみな」

何事も無かったかのような仲の良い兄弟を演じる二人。腹の内はともかくこの江戸で藩内にもめ事ありと外に漏れる事だけは避けなければならない。明日の將軍への参勤交代の目通りには富司信と江戸家老も連れてゆくことになる。江戸家老弦史郎の隠居届は数日後としても明日はなにも無かったかのように穏やかな表情での老中との接見が欠かせない。なによりも、厳罰に処すことはたやすいが誰にでも親も兄弟も妻も子もいる。残された者が遺恨を持つことにもなればまたいつ、お家騒動に発展するやもしれない。幕府の耳に入って改易につながることは避けなければならない。

京之介らは津坂藩江戸上屋敷にて三晩を過ごし朝早く水戸街道へと向けて旅たった。

空は青く容赦なく照りつける太陽。積乱雲が鮮やかに立ち上り、幾つもの白く大きな雲が風に追われて流れる。三人は道を塞ぐかのように並び、歩調を合わせてはやり過ごし、小走りで駆けては再び三人が並んで歩き始める。

「ねえ、旦那。弟君と江戸家老の沙汰は聞いたけれど、他のやつらはどうなったんです？」

追い付き早に善次郎が泣き崩れた腰元を氣遣った。「うん？ 幸いなことに大磯宿で床についた家来たちも回復したそう。腰元は頭を丸めて出家することに。目付役は俸禄を召し上げられて親戚預かりらしい。まだ子供が小さく、元服ともなれば本人は隠居して家名は元に戻る。他の者達も似たような処分と聞いたな」

「へえ、寛大だね。津坂藩の殿さまは」
おしずが感心したかのように口にした。

「そうだな。でもそれしか道がないのかもしれない。戦国の世ならいざ知らず、この平和なご時世にあつては、お上ににらまれたら藩なんてあつという間に潰されてしまう。大名家には大名家なりの悩みがあるのさ」

京之介の脳裏に今は改易となった岡島藩の雄大な山々の稜線が浮かんだ。

「へえー。そのてんおいら達は気楽だよいね」

「そうだよ、善次郎。私たちは恵まれているよ。こんなに気の合う仲間がいてね」

おしずは心の底から良い仲間巡りに巡り会えたと思つて改めて思つた。女の一人旅はいくら強がつて見たとて心細くもあり危険も伴っていた。

「それよりか旦那。虫の鳴くころまで津坂藩の厄介になるんじゃないんですか？」

「あの場はああ言ったが、窮屈なのはごめんだ」

「そうだよ、善次郎さん」

「そうだよね。たんまりとお礼も頂いたし、当分は気楽に流れ歩くことができらあー」

「何言ってるのさ。上屋敷を出た早々に善次郎さん、飛脚屋に飛び込んだじゃない。いくらも残ってなんかいないんじゃないの？」

道中奉行から受け取った札金を京之介は三等分しそれぞれに渡した。一人が三兩と一分、一朱。残りの端数はともかく三人にとつて久しぶりに手にする大金だった。

「次に落ち合うのは水戸の手前の長岡宿あたり、道のりは三日もあればじゆうぶんだが、一ヶ月後でどうだ」

「あいよ。承知。道中奉行さまからたんまり頂いた路銀は飛脚便に乗せたし。残ったお足は、おしず姐さんにくつついて増やしたいし……」

「ばかだね、私はいかさまはやらないよ」

「わかってますよ。でもね、姐さんの癖は先刻承知」

「よく言うよ。私に癖なんかありやしなないよ」